

Ⅲ 研究のまとめ



Ⅲ 研究のまとめ

1. 研究主題・副主題について

【先生方からのご意見】

〈論理的思考力について〉

- ₁ 論理的思考力はどの教科でも必要な力だが身につけさせるための手立ては難しい。学んでいく価値があると思う。
- ₂ 論理的思考力について共通認識をもつために学習会を行うなど、取り組む内容や目指すべき児童の姿、授業のイメージを具体的に提示していただけたので、研究が進めやすいと感じました。
- ₃ 「論理的思考力を養うための指導法の工夫」という副主題があることで、研究主題にせまるために何を研究したら良いかが明確になって、良かったと思います。副主題の論理的思考力について、重要であることは分かりながらもなかなか独学で学ぶには手を出しにくい分野だと思うので、学校全体で研究できる機会はとても貴重に感じた。
- ₄ 研究主題は、今の時代を生きる子供たちにとって必要不可欠なことであると思います。そして、自ら学び、考えを深めるために論理的思考力を高めることは有効であると思います。

〈継続研究について〉

- ₅ 昨年度からの継続研究でより研究が深まったと思う。
- ₆ 2年目の研究で、昨年度の研究から深めることができたと思います。
- ₇ 去年からの続きで、良かったです。
- ₈ 2年同じ内容での取り組みだったのでより深く学ぶことができました。
- ₉ 昨年度の研究を生かして、ICTなどさらに今日的な課題も入れながらの研究がなされてよかった。

〈その他〉

- ₁₀ 本校の児童の課題点に合った適切な主題・副主題だったと思います。
- ₁₁ 先生方と1つの同じ題に向かって、授業を考えていくなかで、自分の授業も見直すことができた。
- ₁₂ 指導法の工夫（今年度は、動き出したくなる課題設定・ICTの活用・確かな発問）が明確で研究を進めやすかった。
- ₁₃ 玉諸小学校に合った良き主題だったと感じます。

【まとめ】

研究主題及び副題については昨年度からの継続研究ということもあり、適切であったという意見が多かった。○₃の記述にあるように、「論理的思考力を養うための指導法の工夫」ということを意識して授業を組み立てることにより、主題に迫ることができた。また、○₄の記述にもあるように、「自ら学び、考えを深めることができること」、そのために「論理的思考力を高めること」はこれからの時代を生きていく子供たちにとって最も大切な力の一つであるため、主題は適切だったといえる。

2. 研究目標・めざす子供像について

【先生方からのご意見】

〈発達段階に即していたことについて〉

- ₁ 発達段階に適した目標設定だと思います。
- ₂ 学年に合った子供像で良かった。
- ₃ 発達段階をふまえての子供像で、分かりやすかったです。
- ₄ 低中高とそれぞれの発達段階に応じた子供像で分かりやすかったです。
- ₅ 低中高で、具体目標があったので分かりやすかった。
- ₆ それぞれの学年に発達段階に合っためざす子供像になっていて良かったと思います。

〈主題・副主題との関わりについて〉

- ₇ 主題・副主題に適応している研究目標及びめざす子ども像であった。
- ₈ 論理的思考力が目標であったため、自分の授業のなかでも論理的思考力について考えることができた。

〈その他〉

- ₉ とても良い研究目標、子供像だったと思います。
- ₁₀ どの学年の先生方も研究目標を達成するため、入念な教材研究と様々な実践を提供していただき、とても学びの多い研究となりました。
- ₁₁ witch型（選択型）の発問をすることによって、全ての児童が自分の意見をもつことができた。選択した理由について、「○○がないと～～できないから。」と、逆説的に説明する児童が多く見られた。低学年の児童が論理的に説明しようとする際、生活経験から仮定して考えるということがわかったのが本実践の成果だったと思う。
- ₁₂ 研究のめざすところが明確にされて、取り組みやすかった。

【まとめ】

研究目標・目指す子供像についてはおおむね良かったといえる。○₁₀ の記述にあるように、先生方が研究目標の達成に向けて、ご尽力くださったおかげで実りの多い研究になった。大変感謝している。○₁₁ の記述は国語科における手立てである。「A・B, どっち?」「A～Dのどれ?」「順番に並べるとどうなる?」といった、選択肢の中から選べる問いかけ・発問である。我々教員が教育に関するアンテナを高くし子供たちの成長や発達のため、さまざまな手法を選ぶことは大変重要なことだと感じている。今後も教員間で情報を共有する中で、最適な手立てを講じていきたい。

3. 研究内容・研究方法について

【先生方からのご意見】

〈「動き出したくなる課題」と「確かな発問」について〉

- ₁ 「動き出したくなる課題」と「確かな発問」に焦点を当てたことで、全員が同じ意識を持って授業づくりを行うことができました。
- ₂ 「動き出したくなる課題」と「確かな発問」に焦点を当てたので、授業づくりをする際に視点がはっきりしていて考えやすかったです。

- ₃「動きたくなる課題」と「確かな発問」は、どの学年、どの教科においても重要な点であるため、他学年の実践も勉強になり、即戦力となって授業に生かすことができた。
- ₄「動き出したくなる課題」と「確かな発問」に焦点を当てたことにより、授業づくりが明確化されよかった。
- ₅甲府スタイルの授業の中から、授業づくりの視点が示されたので、取り組みやすかった。
- ₆授業作りの視点が明確で、分かりやすかった。
- ₇焦点化されていたので良かった。
- ₈授業実践では、研究のポイントが焦点化されていたので、比較的考えやすかったです。

〈ICT 活用について〉

- ₉ICT 活用については、個人的にも課題に感じていたので、6年生の授業での活用方法や夏休みの研修も有意義で、自らの授業へ役立てることもできました。
- ₁₀ ICT の学習会では、これから使っていけそうな様々なツールをまなぶことができよかった。
- ₁₁夏期の ICT 研修がとても有り難かった。
- ₁₂低学年の段階で ICT を活用することは難しいと感じることが多いですが、できることから積極的に活用していきたいと思いました。
- ₁₃学習会があり、とてもよかったです。ICT 活用についても引き続き研修をお願いしたいです。
- ₁₄玉諸小として低中高ブロックごとにどこまで ICT 活用能力を身につけさせていくのか明確にしておく必要がある。
- ₁₅研究授業が3本あり充実していました。学習会ももちろん大事ですが、授業研究で先輩方の声かけや児童の様子に触れることができたのが、とても勉強になりました。特に ICT を踏まえた論理的思考力の授業は、日々の積み重ねが大切だということを学びました。授業を考える上での甲府スタイルはわかりやすかったです。
- ₁₆教員が Jamboard の活用に慣れてきた、あるいは気軽に操作し使いこなしていけるように、研究会でも取り入れることができるのではないかと感じた。体育館での会場づくりやそれに伴う準備がカットされ業務改善に繋がるのではないだろうか。安心して参観に行くことができる自身の学級づくりをしっかりと行っていきたい。

〈デザインシートについて〉

- ₁₇授業デザインシートのひな型を早めに提示してくれたおかげで、一人一実践についても校内研究の視点に基づいて行うことができた。
- ₁₈授業づくりでは、授業にねらいやこだわりをもって行うことの大切さや楽しさを感じることができました。他の先生方の授業を参観することはできませんでしたが、デザインシートを共有していただいているので、まねできることをまねしたり、もっと知りたいを思ったことを直接尋ねたりして、私自身の学びも深めていきたいです。
- ₁₉なかなか授業を見に行くことができませんでしたが、一人一実践をすることで、自分の授業について振り返り、改善するきっかけになったと思います。

○₂₀ 研究授業の見学や、1人1実践を通して、私自身、多くの学びを得ることができました。夏期学習会もとても参考になりました。

〈学習会・授業参観について〉

○₂₁ 国語科・算数科における論理的思考力を養うための授業作りについて、研究授業やその後の講師の先生方からのご指導で深く学ぶことができました。

○₂₂ 授業参観を行うことができ、研究が深まった。

○₂₃ 授業参観がなかなかできず残念だったが、ICTの講習会や講師を招いての授業研究ができて良かった。

○₂₄ 学習会では、講師の先生方の楽しいお話や実践を聞くことができよかったです。授業は、子供たちが「もっと知りたい」「考えることが楽しい」と感じられるように工夫することが大切だと改めて感じました。いろんな先生方の授業をみることで、どんどん参考にしていきたいです。

〈言語活動の充実について〉

○₂₅ 子供たちが論理的に考えるようになるためには、豊かな言語力を身につける必要がある。子供たちが豊かな言語力を身につけるためには、言語環境の充実が欠かせない。今後も言語環境の充実のための手立てを講じていく必要がある。

【まとめ】

○₂₅ の記述に見られるように、子供たちの思考が「論理的」になるためには、言語環境の充実が欠かせない。子供たちが言語に触れる場所の一つに教室が挙げられる。例えば、教室の掲示物、教師の言葉遣い、子供同士の言葉遣いなど、教室における「言語」には枚挙にいとまがない。それぞれについて振り返り、一つずつ改善していくことは言語環境充実の第一歩だといえる。さらに、家庭との連携による家庭での言語環境の充実も一考の価値がある。このように、子供を取り巻く言語環境をより充実させていくことは、子供たちの論理的思考力を高めるための一助となる。

昨年度より、授業デザインシートを用いて、一人一実践のまとめを行ってきた。A3用紙1枚にまとめるため、要点を絞って記述する必要がある。また、他者も見やすい。今後もこのデザインシートを蓄積し、本校研究にとっての財産となっていくことを期待したい。多様な実践をしていけば、より豊かなものになっていくと感じている。ICT活用については「5. その他」で述べる。

4. 研究計画・研究組織について

【先生方からのご意見】

〈3ブロック制について〉

○₁ 3ブロックに分かれたことで、学年ごとの様々な視点から「論理的思考力を養う授業」について考え、より具体的に目標へと迫ることができたと思います。

○₂ 3ブロックでいいと思います。

○₃ ブロックごとに分かれて研究を進めることで、子供の発達に応じた学習指導の仕方について学ぶことができよかったです。

○₄ すみれも低中高にバランス良く配置して頂いたので、担当する学年の先生方と研究

ができて良かったです。

○₅ 児童の発達段階に合った意見を交換することができ良かったです。

○₆ 無理なく進められる構成だったと感じます。

○₇ 来年度も3ブロックで研究を進めていければと思う。

○₈ 本校は大規模校のため職員数も多い。そのため、3ブロック制で良かったと思う。また、ブロック毎に研究授業を計画・実施することで、発達段階にあった研究を深めることにつながった。

〈研究計画について〉

○₉ 無理なくできたのではないのでしょうか。

○₁₀ 低学年の研究授業の時期が遅めだったため、研究授業の前に他の学級で先行研究をすることができた。より勉強になったため、ありがたかった。

●₁₁ 行事や感染対策に追われる中、2学期に2本の研究授業・反省会は、あわただしかった。ブロックの研究会の予定もなかなか入れられなかった。

〈その他〉

○₁₂ 授業を提案してくれた学年・先生方に感謝したい。

【まとめ】

本年度は、低・中・高ブロックによる研究授業を1本ずつ行なった。

- 低学年 三枝 陽 教諭 (第1学年 国語科「じどう車くらべ」)
- 中学年 内藤 千草 教諭 (第4学年 算数科「四角形の特ちょうを調べよう」)
- 高学年 牛奥 達也 教諭 (第6学年 算数科「円の面積の求め方を考えよう」)

3ブロックに分かれたこと、それぞれで研究授業を行なったことについて、良いと回答があった一方で日期的に厳しい部分があったという反省も挙がっている。授業の準備や反省に十分な時間が掛けられるような、余裕を持った研究計画を立てていく必要があった。

これからも若手教員が増えてくるため、授業を観たいというニーズが増えてくるだろう。そのため、「お互いに見合う場」を保障することは急務である。今年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、お互いに見合うことはほぼ叶わなかった。今後は、研究授業でなくても気軽にお互いの授業を参観できるような環境づくりをすることが必要だと思われる。今年度より行っている、クラスルームによるOJTも継続して行っていき、積極的に実践の公開をしていきたい。

5. その他

【先生方からのご意見】

〈来年度の方向性について①…今年度の研究を踏襲。そして研究3年次へ…〉

- ・₁ 今年度の研究を踏襲していく。
- ・₂ 来年度も今年度と同じように、継続して国語や算数の授業づくりについて、研究していきたいです。大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・₃ 来年度も継続研究が良いと思います。3年目なので、何か成果物(「玉諸スタイル?」「話し方?」)みたいなものがあると良いのかと、個人的には思いました。
- ・₄ 実践中心で3年目なので、学校としての考えが出ると良い。

- ・⁵若い先生が多いので、今年度のような研究の継続でいいと思います。

〈ICTの活用について〉

- ・⁶ICTのスキルについて、かなり差が生まれて来ていると感じている。引き続きICTの講習会は必要だと思う。また、初任者以外の若手の先生には、ぜひ積極的に研究授業をして力をつけていてもらいたい。
- ・⁷今年度と同じ方向性で良いと思いますが、ICTに関しては、個々の力量の差が大きいと感じますので、研究より研修に力を入れて行っても良いかと思います。
- ・⁸今年度、論理的思考力を養うためのICT活用については研究がなされたが、来年度はもう少し幅を広げて、様々な角度からICTの活用について考えてみたい。
- ・⁹GIGA 端末を活用した授業づくり、教材の開発（情報モラルを含む）
- ・¹⁰今年の理科室で行ったようなICT活用講座が何度かあると嬉しいです。

〈みんなで一歩前進！〉

- ・¹¹日々の研修では、「甲府スタイル」や「山梨スタンダード」に基づいた授業を実践し、自己の授業をふり返り、改善し、授業内容や研修内容、成果や課題を同僚とクラスルームのストリームで共有し、それをもとに日々学年や世代を超えた先生方と意見を交換し、児童に還元していく。このような毎日が校内研究会のような学びの風土に満ちた職員室にしていければ理想ではないでしょうか。教師の力量形成の観点からも同僚との学びやOJTなどによる日常の繰り返しがとても大切だと思います。
- ・¹²変化の激しい予測困難な時代の中でも子供たちが心豊かにたくましく生き抜く力を身に着けさせることは学校の使命です。だからこそ日々の変化をいつも前向きにとらえ、ICT 機器や一人一台端末を授業に有効活用していく教師像が求められます。そう考えると、校内研究会のあり方も研究授業を通しての仮説検証型にこだわらず、今日的な教育課題についての研究を通して、実践的な教員の力量形成を目指すことがよいのではないのでしょうか。また、先生方の多忙化改善の視点から考えれば校内研究会の時間は、これまでの時間の使い方を見直し、60分間の研究会の時間で集中して取り組み、さらに、十分な活用の認められなかった分厚い研究冊子の作成や多くの時間を費やしていた指導案には時間をかけず、目指す授業について語り合うことに重点を置く（日々のクラスルームでの情報共有も同時進行）ことで、研究紀要を廃止、指導案の簡素化→今年度の授業デザインシートを作成し、一人一実践（教職員評価の授業観察授業観察授業と兼ねる→1回目の面談で目標を管理職と共有後ならいつでも実践可能）を行っていくような形もいいかと思います。
- ・¹³校内研究会の時間（60分）には教員が今日的な教育課題について実践的に学んでいくワークショップを計画していったらどうでしょうか。

例1 →chromebook の基本的な使い方と授業での有効な使い方【講師 田中洸平先生 情報教育主任】

例2 →ネット型ボールゲーム「テニピン」の授業づくり【講師 内藤陽介先生 玉諸小学校テニピン普及委員会理事長 山梨学院短期大学 准教授 今井茂樹先生】

例3 ペッパーを活用したプログラミング学習【代表 園原隆敏 アイやまなし人材育成】

例4 学級経営～学級づくり～【高橋英児先生 山梨大学教授】

先生方が「主体的に対話的に学ぶ」校内研究会にしていきたいと思います。

〈今年度の研究全般について〉

- ・¹⁴ 研究授業が素晴らしかった。講師の先生方のお話も分かりやすく勉強になった。学びの多い研究会だった。
- ・¹⁵ コロナ禍なので実際の授業を見ることができなくても、ビデオ視聴という形もありだなと思いました。早く見ることができるといいですね。
- ・¹⁶ 多くの学びをいただき、自分の授業にも生かせるアイデアや知識をたくさん得られた校内研究でした。
- ・¹⁷ コロナ禍で多人数での参観ができない中、360度カメラでの授業参観が画期的でよかったと思います。授業者にとっても児童の様子を知ることができるよい機会（機械？）だと感じました。
- ・¹⁸ 講習会も開いていただきありがとうございました。
- ・¹⁹ 来年度はもっと積極的に参加してさらに様々なことを学べるようにしたい。
- ・²⁰ 様々な先生に話を聞いたり Google クラブルームでOJTを参考にしたりして、授業の幅を広げていきたいです。授業の実践を気軽に共有できることがとてもいいなと感じました。
- ・²¹ ねぎらいのお言葉。（多数）・・・ありがとうございました。

【まとめ】

来年度については「継続研究をしていくと良い」という意見が多く出された。来年度は3年次の研究となる。・³に見られるように、発達段階に合った話型や掲示物といった成果物も意識して作成していきたいところである。また、板書の決まりを学校全体で共通化していくことも、子供たちの学びやすさにつながると考えられる。「めあては青で囲む」「まとめは赤で囲む」「授業の流れ（課題、めあて、まとめなど）が分かる補助表示」など、すぐに共通化できる部分から始めてみてはどうだろうか。一方で、昨年度から作成している「授業デザインシート」や「研究授業指導案」は実に立派な成果物、財産であるといえる。来年度も実践を積み重ね、より一層研究を深めていきたい。

ICTの活用に関しては、講習会や日々の実践、クラブルームの活用を通じた情報共有等を通して確実に前進している。今後も研究と研修を同時進行し「いつでも、誰でも使える」文房具化を目指したい。また、子供たちの未来のために「デジタルか 紙かで迷ったら デジタルで」（字余り）を合言葉に、助け合いながら活用を推進していきたい。

・^{11~13}では、大変前向きなご意見をいただいた。「校内研究はこうあるべき」という既存概念にとらわれず、目の前にいる子供たちのために私たちが学ぶべきことは何かを常に問い続けることは我々教員の使命だといえる。特に・¹³では、「教員が今日的な教育課題について実践的に学んでいくワークショップ」という新しい形の校内研究の在り方について提案された。（今後「こんな研修を受けたい！」といったご要望がございましたら、内藤までお知らせください。）先にも述べたとおり、「研究」と「研修」を両輪として今後も前進していきたい。

6 研究を終えて

今年度は、研究目標を「論理的思考力を養う授業を通して、自ら学び、考えを深める児童を育てる」と設定し、研究を進めてきた。そして「論理的思考力を養う授業づくり」の拠り所として「甲府スタイルの授業」を取り上げた。中でも「動き出したくなる課題」「確かな発問」を意識し、探っていくことで、教師の授業への意識が改善され、授業の改善につなげることができた。また、「ICT活用」についても並行して、その可能性を探ってきた。

「動き出したくなる課題」を意識することで、子供たちは課題を自分事として捉え、主体的に学ぼうとする姿が見られるようになってきた。例えば第4学年算数科「垂直、平行と四角形」の学習では、玉諸地区の地図で子供たちの興味関心を引き出し、さらに直線の簡易地図を提示したことで、子供たちの「平行を見つけたい」という気持ちを高めることができた。また、簡易地図の中には、すぐに予想がつくものから、しっかり調べないと分からないものまで含まれていた。そのため、自力解決だけでなく、友達と協力しながら最後まで課題に取り組むことのできる工夫も見られた。第6学年算数科「円の面積の求め方を考えよう」の学習では、「簡単→難しい」の順で問題を提示することで、子供たちの関心意欲を高める工夫が見られた。

「確かな発問」を意識することで子供たちの思考は深化・発展し、子供自身が考え表現する姿が見られるようになってきた。研究会では「確かな発問」の内容とその内容をどのような言い方で子供に投げかけるのかの精査、検討を重ねてきた。低学年では「自分と同じところ、違うところはどこかな?」といった共通点や相違点を問う発問を第一に行った。また、第1学年国語科「じどう車くらべ」の学習では、「 $A \cdot B$ 、どちらかな?」「 $A \sim D$ のどれかな?」といった、選択肢の中から選べる発問をすることで、全ての児童が自分の意見をもつことができた。さらに「どうして選ばなかったのかな?」と問い返し発問をすることによって、より必要なことが明確になったり、自分の思考を疑ってみる効果があったりし、考えが深まるということも明らかになった。高学年では、「どのように考えたのかな?」と根拠を問う発問をしたり、「いつでもできるのはどれかな?」と一般性を問う発問をしたりすることで、子供たちの思考が深化・発展するよう努めた。また、授業の中では「〇〇さんはなぜそう考えたの?」「〇〇さんの続きを言えますか?」といった、子供たちの考えや発言、つぶやきからの問い返しを大切に、さらに次の問いにつなげることができた。このように、1時間の授業の展開には、発達段階にあった発問の種類及び組み立てを考えることが重要であることが分かった。教師がよく練られた「確かな発問」を問うことで、子供たちの主体的に学ぶ力や思考力、表現力を高めることにつながったことは大きな成果である。

「ICTの活用」として、まず Google Workspace for Education の活用が効果的であった。第6学年算数科「円の面積の求め方を考えよう」の授業では「Jamboard」を用いた実践がなされた。自力解決の際に「Jamboard」を活用することで、友達の考えを閲覧・参考にしながら思考することができた。また、自分自身の思考に合わせて複数枚のシートで考えを表現することができ、比較検討の際には、順序立てて表現することもできた。これはまさに、論理的思考力を養う授業につながる活用方法である。次に、教科書に準拠した「デジタルコンテンツ」の活用も効果的であった。第5学年算数科「三角形の面積の求め方を考えよう」では、自力解決場面において、紙媒体のシートとともに「東京書籍デジタルコン

テンツ」を用いた実践がなされた。デジタルコンテンツを活用したことにより、解決の見通しが立ち、解決や検討のために必要なツールや時間が確保でき、実感を伴った理解になった。また、紙媒体のシートと併用することにより、子供たち一人一人の学びやすさにも対応することができた。

上記のことから「動き出したくなる課題」「確かな発問」「ICT の活用」等の手立てにより研究目標にある「自ら学び、考えを深める児童を育てる」ことは、ある程度実現することができたように思う。ただ一方で、以下のような課題も挙げられている。

- 授業を通して「子供対教師」のやりとりが多かった。今後は児童に「問い返しの発問」をしてクラス全体で意見を交流する時間を多くとっていきたい。
- 教師が授業内容を説明しすぎてしまった。「子供が思考し、表現する授業」を目指したい。
- 「動き出したくなる課題」を意識するあまり、課題提示に時間がかかり、時間がオーバーしてしまった。45分という決められた時間の中なので、軽重を付けた授業づくりをしていきたい。
- ICTを使うことで、時間のロスが見られた。ICTの活用に関しては、子供も教師も「慣れ」が必要である。ICTの文房具化を目指したい。
- ICTのスキルについて、教員間で差が生まれて来ていると感じている。研究と研修の両輪で進んでいきたい。
- 論理的思考力を養うためには何といても「言語環境の充実」が欠かせない。今後も言語環境の充実のための手立てを講じていく必要がある。

研究授業では多くの授業を費やして、教材研究をすることができるが、日々の授業においてはそれほど多くはできない。限られた時間の中でぶれないような教材研究をするためには、1時間の授業のねらいを明確にすることと、そのねらいを達成するための「課題」と「発問」をあらかじめ考えておくことが大切である。さらに、「GIGAスクール構想」が打ち出された昨今、デジタルとアナログが融合した「ハイブリッド型の授業」を目指していくことが必要である。来年度以降、研究テーマが変わっていったとしても、「課題」「発問」「ICT活用」を授業改善の軸として継承・発展していき、本校の特色としていければと思う。

現行学習指導要領では、知識・技能、思考力、判断力、表現力を身につけさせるだけではなく、それらの活用の仕方や、自分自身で問題を発見し、解決に向かう意欲、さらには多様な集団における人間関係の構築などを育成しなくてはならない。今、学びの転換期を迎えている。「自ら学び、考えを深めることのできる児童を育成する」ために、我々教職員も主体的に学び続けていきたい。